

高病原性鳥インフルエンザの防疫訓練について

南総食肉衛生検査所 ○豊田 拓郎 小泉 慎一郎
 吉岡 拓治 竹田 雅一
 嶋野 正義

1. はじめに

高病原性鳥インフルエンザ(以下、HPAI)は国際的に最も警戒されている家畜伝染病のひとつである。近年、東南アジアで HPAI が発生している。HPAI がまん延すると、その被害は発生農場のみならず、周辺農場およびわが国の養鶏産業へ多大な影響を及ぼす。また、人の新型インフルエンザによる発生の可能性もある。平成22年度に宮崎県で発生した HPAI は、農場だけではなく大規模食鳥処理場でも摘発された。大規模食鳥処理場での HPAI 発生は、全国で初めてである。この時宮崎県の事後報告では、関係機関との連携が取れていなかったことが問題であった、と報告している。食鳥処理場での HPAI 発生したことにより、当所は HPAI に対する危機意識はより一層高まったが、大規模食鳥処理場における HPAI は例が少なく、対策は困難である。さらに、宮崎県の反省点であった関係機関との連携も円滑とは言い難い。そこで、我々は大規模食鳥処理場での HPAI 発生に備え、家畜保健衛生所、衛生指導課を交え HPAI 発生を想定したシュミレーション訓練を実施した。

2. 方法

演習日時:平成 24 年 12 月 18 日。

場所:南総食肉衛生検査所(当所一階部分および車庫を食鳥処理場と想定)

人員:南総食肉衛生検査所職員

協力:東部家畜保健衛生所防疫課長、県庁衛生指導課公衆衛生獣医班長

材料:生鳥 10 羽

想定状況:食鳥処理場で現場に派遣された検査員が生体検査で HPAI を疑う。

現場での指示、各方面に連絡し簡易検査を実施、疑いが無くなり、
処理場再開の指示をする。

役割分担:現場検査員、在庁者、食鳥処理場工場長、記録係

3. 演習結果

演習を行った結果、家畜保健衛生所との連携がいかに困難であることを認識することができた。連携を阻害する要因は、主に3つであった。

① 対応方針について

食肉衛生検査所の対応では簡易検査を重視していた。しかし、家畜保健衛生所は

農場情報、死亡状況など防疫上必要な情報を重視していた。

② 簡易検査の対象が異なる

当所は生鳥 5 羽が検査対象となっている。一方、家畜保健衛生所は死鳥の検査を重視している。今回の演習で、当所は生鳥のみ簡易検査を行ったため、家畜保健衛生所は死鳥を含め簡易検査するよう要求した。しかし、死鳥の検査指示を受けた時には、すでに防護服を脱いでしまっていたため現場は混乱した。

③ 簡易検査後の対応の違い

当所では簡易検査で陰性と結果が出た場合、処理場を再開できることとなっていた。しかし、家畜保健衛生所では簡易検査の結果に関わらず PCR を行い、その結果により HPAI の有無を判断する。このことにより、処理場再開までの想定時間が大幅に延長した。

4. 考察

問題点の根本的な原因となったのが、食肉検査所の HPAI 発生時の対応基準である平成 15 年度の厚生労働省による通知と、家畜保健衛生所の対応基準である農林水産省による平成 23 年の防疫指針で、HPAI 疑い時の対応が異なっていることである。厚生労働省では通知を出して以来改訂がないのに対し、農林水産省は防疫指針を随時改訂していることにより、様々な対応に違いが現れていた。

5. 結果に対する対応

問題点について家畜衛生保健所と検討・協議し、マニュアルの改善に取り組めた。

① 対応指針について

家畜保健衛生所との連携を重視することとした。具体的な行動として、情報収集を最優先事項とし、早期に連絡を取り合うことで、連携は向上され则认为る。

② 簡易検査の対象について

死鳥の検査をマニュアルに記載。根拠となったのは、HPAI 発生時に生鳥 5 羽の検査結果は全て陰性であったのに対し、死鳥 9 羽は全て陽性であったことが報告されていたためである。死鳥を検査することにより簡易検査の有用性は増したと考える。

③ 簡易検査陰性時の判断

簡易検査で死鳥を検査すること及び HPAI を強く疑う状況でないことを家畜保健衛生所と確認することを条件として、簡易検査の結果が陰性だった場合、処理場を再開することが可能となった。

6. まとめ

実際の防疫作業に近い体験をすることにより、具体的内容や手順、必要資材、作業性などを確認できた。特に、考えていたように効率的に動けないこと、判断の迷う事態がいくつも起こること、緊急時に必ず人数を確保ができるとは限らないことなど数えきれないほどの問題が発生することなど、作業の困難を実感することができた。また、生鳥を利用できたことにより、簡易検査に慣れることができたことや、関係機関と訓練を行うことで意見を聞くことができ、防疫作業全体の流れを把握することは訓練の成果として十分なものだった。当所のマニュアルをもとに家畜保健衛生所と協議を行えたことが一番の収穫であった。

今後、職員の移動に伴ってHPAI対応の技術を忘失させないために、HPAI対応訓練を繰り返し実施する必要がある。